戯場狂歌百人一首

全

へ利ク
3593

利
3573

大正三年大阪毒物研究会
三月例会ニ於テ試ミタル吳氏の毒
性ある人一百廿四首中

「戯場ニ有ル人一百諫鼓苔ハ
とあり けれども ちがひ

序

小倉山の別荘ニ百人一首を撰ぶこのかいしゝ京極黄門定家卿なり。大戯場の
花柵ニ人百首を飾ることゝ諫鼓苔ハ屋左丸なり。彼ハ萬葉古今集抜書なり
故和歌乃書抜ハ一番ハ古代和歌にて奈良の二十字ハ狂歌ハ此の子
のゝ太郎。傳坊組乃眼ニ於ハ不ず。其ゝ萬載集狂歌集。狂言ばなし狂歌正本。
才二ハ世ニ湯ハ。世ニ居崖乃高郎ハ所謂見功者樂屋採見ハ連
乃身と歌ハ。素より和歌と狂歌と於ハ茶屋ハ観客寄ハ奇しく。
狂言狂歌ハ連歌の戯場ニ作ル。風体あり格式ハ。シテワキあれバ體用あり。
四番續ハ四季恋雑。兼題ハ。初日出。苗ハ毎ハ規則ハ。序
幕の縁語ハ法ニ典をしたゝ。法合場ニ連続ハ。

室井平蔵 寄贈

に條を流せるごとく、紙に披講の文を出だすの毛穎、列り。詩は読歌の
太夫三位、發聲せざるうちにうたい出れば、助声、ひろ風を語れあり。此幕の出語
津のうち。もしとろれば、濁本奇。旋頭四文字ばかり出まうに、岩終場れ言の
なりんや。當座題の達吟、代役者、ち達者にあるべし。怪しやく吹水
ふるむ挿頭の辭。ぢやうんかうちを密事を解く御結の辭。ゆ上本
何ごとや社と純也覧ト乃よと方。手本業○当冠傳受秘密を吁
ら書れ。さるいぶ実に大大力もあへく二十級。張傳乃首を投半。
ト当ち本得の黄紙を取りて今れ看客やとやいぶ。本あと汲て本米
炊き。釜ちを宣ふ炊して正真の芋を煮れを。近体の少力紙上ち
ごと。今れも判者ちつも新しきれ喜ぶ。其くれいぶ〜貴ふるくを他の

紙

唯四人の作ぶりとて劇場の四人乃月も作りとぞ示人分りの見功者
なれば戯言を唯さんとて嘆きを示人為と表にせんやと戯れに
はしり歌ども竟中を共居居者とおりの狂言本とも不関して古人の
風調微く紋切を拵し。鸚鵡石も不讃して和歌は聲色細ぶ真
面目を得る。元百貫ぶ承ぶ小倉やぶきへ乃ふ居宅堺町で
家名を何ぶ屋給金を遠分百両出さるぶ諏訪しても出るぬ
たぐらぶ出て。此所判記八大極上真実吉は新人やさん時者近衛氏
はぐけ百貫。よく切ぶ承ぶ乃と彼ぶ上をはぐて為貫侍を完
神ぶ品乃高声商ぶあゆ名なり。通家狂言堂乃ぶ乃百貫。よく
桟敷に受ぶ。ぶ紋と美ぶ商を乃ぶ狂歌体と出ぶ人。句讃の

讃義棚ぶ乃ゆ出ぶ。天智天皇蟬丸も皆劇の作ぶ押合
く。金毘羅ぶ商も西りを坐頭い。百貫ぶ乃番附面の位
と方門ぶ○圏と隔く番と定ぶ名人古手ぶ狂言人満員ぶ江多
乃ぶ乃ぶ中ぶ中ぶとぶき戯咲歌ぶ作ぶ乃ぶ木戸
通ぶ者中ぶ讃立めぶて。ぶ乃斯様の生き物ぶ一段的人乃古風に
倣ひ。序ぶ出ます紋を本町庵。

式亭三馬戯題

天智天皇

沒の波まくらと
人の言葉
我が袖もぐるくき
涙ぞ
濡れぬ

持統天皇

水仕合とて
わとりて
袖ほしたり
あまりあり
あまりぐ山

柿本人麿

姫のまゆ
ちぐるを
まちうけく
あしの
ちりぬ
ぬれ

遍昭

月夜乃萩
物陽の絵図
姫ぐ乃
高根

儀九
安
入れの
二ツ三ツひざくの
ぬきく時ぞしの
秋さえみーき
中納言家持
雪の月花
あんどう乃
ちりをこれぞ
秋ぞ
安倍仲麿
出る月
月かも
出る月
出る月
出る月

小野小町
我成せてふる
うぐひせまふ
輝九
おしやこの
ゐるもきこゆる
本戸口よ
きらるもしらぬ色
あつかきろの関
参議篁
大嵯峨
級者異類の
ひやうぐんと
人あはせげよ
わまれ侍り
俗西遍照
ひのきがさ
どのさぐき
ひ女
の姿
本戸口
きぐ〜さぐめん

陽成院

はづまうハ
女出入乃
水仕合
ゑゝぐさのりく
ふらと立りめる

河原左大臣

けんとうゝ
人乃通で
出笑の毛し
みぐるゝ
我ゆめ
なくくれ

光孝天皇

雪ゝ
屋際
かゝぐハ
さのゝ
我衣
雪はふりたく

中納言行平

仏
おもさでハ
うらくいそぎ
いなゝ
まつとも
今かゝりこん

在原業平朝臣
紀有常が娘を
妻とせんく
とらるゝ間の
なげきて
ものゝ
あはれを
しるべき
なり

後京敎の
ものゝ
ひとりて
ゆめ
ばかりの
ひとり
ぬる
夜の
ふけ
ぬる
ほど
ながめ
ふる
ながめ
せし
間に
月の
かたむく

俤勢
けんくわ
中ゝ
しわ
ものく
ゆ
ゆ
ゆ

素性法師

文屋康秀

大江千里

蟬丸

三條右大臣

芝居ぜき
料理言ごとり
のこき行ば
人ふ土ゝ拾て
くるくるもがれ

貞信公

物ふもひ
芝居の客も
ぬけゝば
今ひとすじのの
ゝんゆきまゝなん

中納言兼輔

酒のこは茶や乃
まるるかをを
まちこのねく
いけゝきてとゝるの
ゝ
かゝを

源宗于朝臣

うゝ
ゝ
ゝ

元河内船頭
いろは
壬生太夫
坂上是則
春道列樹

紀文

ひるうだんの
のくしがり
ぎりぎりぎり
ぎりぎりぎり
ぎりぎりぎ

文屋
朝康

いかそてを
市川流乃
たちかを
ぬいとめて
ぬぐそちりける

右近
切髪乃
前髪
そりこそ
おしあせ
人乃命乃
をくるを
有るか

参議等
手紙を
ぬぐり
書に
奈良乃
わやらくなる
人をおひ
ぬ

平兼盛
うく
役者
おもてを
ぬぐ
ものや
人乃
ゆふまぐ

手生徒見
弟子
役者むきの
人ぶぞえきの
ちひそあーぐ
清水元輔
仕舞
たまゑ
ものまね

禁中納言
教忠
丹後三郎
剣
人とも分れも
恨ざまし

謙徳公
てらうやれ
はたらへ
のうしよぐれくり
分のいてぐ
なりぬ屋敷の

男稼好き
ぬけとうし
かとれの
あとを
追つかけて
ひ来ても
らわれ立のたうる

高野の法師
お戸とこの
高野ほて
のらへども
人こそこんね
秋の来は

源重之
ひとのよく葉へも
見てこの宮
ぐでけくりの紙
物の上るる

本居紙宣名所
大隅りとぐらく
ひろきこと
柏紙
義孝
うらぐらの
幕をを
とくとも
柏の
とる
義孝寅方名所
むく後春ふぐ
黄ぐく
さうも
ゆるゆるひと
義孝道長名所
三居
せとゆの
名ぐう
牧うらめ
わさぐ

右大將道綱母
豐夏もてる
後世の暮れ
いのりかなはぬ
ものとうたれ

儀同三司母
もとのこころ
きつかみも
くうちう
ゆかぬ
いのらぬものか

大納言公任
まだらくと
大きれ
のびまて
名ゝてゝ
ゝきこえ

和泉式部
宮ばきの
名れを
今一ちび
わすれ

宵武郎
なるかなとみあげて
わとのやこ
雲くもまにに
秋雪の月の郎

大貳三位
久しぶりにて
わとくとハ誰やと
いでそよ人こそ
ゆかしけれ

赤澤清
大江ろけ
舞基
いのぐい扱
かくぶくまでの
月をみるる

小式部内侍
大江戸
くぐり役者の
ちろぬぐい
まぐみもえび
あまれもだて

伊勢之浦
御殿場にて
せうまの穴
さうじの
ふ九重に
白ひぬるか

清水納言
ものとは
ちぐふく
木戸も
きまりはる
よにあふ坂乃
関はゆるさじ

左兵衛督雅
風流ぞと紙者
あつくくらづる
人ぼくそうで
いつくしめるか

種中納言宣頼
木戸芸者はくふ
こうはもあるまうふ
ゆるゆるわるふ
せくの
めづらし

相撲

ねまごろ所
ふんろぐろう
まもる
さくれしだて
立てくらるん名こそ
をつけまし

大僧正行尊

大ぬてはされなく
ひとりぜつる
屁の
そかつり
ぬてたらんもの

園城寺僧侶

悪僧のもだの
役者添ふまく
のひかくんん
名ぬきをつ紋

三條院

若ぶのこ
ふんぬまつ姫
ひとすま
ねく
立うるべき若ぶの
月うら抑

能因法師
家屋敷なつかしき
板の二三枚
玉川の川乃
あらしに
良選法師
幕のきのきあと
柏ゝ
田舎うゝ
しぐれ
秋の
天満宮御祭
上さで
神の

和中納言
匡房
奥深く
花の仕うけ哉
和山乃
源後頼朝
切腹
けんくを大ぢご
たくぼもう
ひうら
五郎
薄原基俊
まゝ
侍
名誉
程云り
あはまこと
秋もいぬめり
法性寺入道前関白太政大臣
大仕懸
どんく上げく
雲井
よまぶ
沖津
ふるみ

宗德院
源義国
絹糸は芝居の
仕ものもまち
ゆくゆくは祇園
三階ゆかし
特賞
浅草川

道因法師
うきひ堪うなくなくすれど命つまじうしなほ命えぬるなるこそ

後徳大寺左大臣
風仕人今宵
幕深ハ
月おもしたたるの月ぞ

皇太后宮大夫俊成
世の中ハ
やまたにくも山鳥の
山の尾にてもなくなる

藤原清輔朝臣
あらしふく
ものを思ふの
うらとせ
今ぞ恋しき

後恵法師
女形男を
但しのを
ねやのうちゆゑ
つまぶりうつくしさ
面白法師
やくまやより
かりしを
ものこそ
ものこそ
我なるぞ
舞蓮法師
見酒もまず
今日もこれぎりと
きり立のがれ
秋の夕べ
白手拭門流
別当
業平も
せばかりし
業平
男性たくて
高ぶりて

式子内親王

千載集

人の為あり
ける
ものを
ぶるさと乃
よりてもぞ
ぬれ

殷富門院大輔

山がつの垣乃
稲葉
水仕合
ぬまにぞ
ぬれ

後京極
摂政
家
家
宮
敷又
濡
ぬれ
ぬれ

一條院讃岐

乃
み
と
る
女
郎
花

鎌倉左大臣

花乃や義家乃
上ゝ代しきぶ乃
わすれ小舟乃
はつかぐらなり

参議雅経

和歌に家を
もよ田も
ふるさとさ
ゝらくみち

前大僧正慈円

世をそ名代を
男子ゝ
ゝ
わづの
すゝゝ

入道お太政大臣

仕事まぐ
ゝとすゝ
きく金ゝ
ゝりゝの
ゝ

藤原定家
大入の土間へ
藤原時院
順德院

自跋

俳優は道を納まる所にて物好りなる。
宜しき哉幕末の国は妨無く実に世の有る
芝居なり。弁当を喰ひ酒を飲め是我知る後の
はるゝ事なく夏来れば冷水の湯にて暑を
機敏に押合ひ敷恵は唯暑きにも影頃の少ふ
見る武士賞びしの歳は山と積る程。狂言は夜
着の金糸芝居を人ぎ所人までもはいおり出くるふ
言ひなりに成る。因て是うの茶屋水茶屋まで不時の

和容乃表ほどひく。入りも大江のあちこちまでも評
判するも吉ゆんさ孔子寺は名長き自然
を通りたるきもひとく遠き近にも行年は。き
ゆ心といえども若男女とても小国も有れ。
優のたりもやとて秀といひきは法もより忠と
物の好き心より見の眼も逢ふ我も人もそち
者も在る業事ぬ乎に前よ主の恵見乃でん
ぼうは大平居よとも有るん是等は類さ
いとず。揃のる獄赤藤あ拙仕安せ小神の武弟

皆清盛の清ふにいでたち。重之朝臣おくもり。花道よ
人くをけうぶめく。定家京極家。乃級者の嘲より
まぐく。金さぶ源さん狂言にぶくどうけ百首はなまな
ず所。彼あのむ石といふものよ等しく。ぶ集めて一冊
とる冊。人やうくうる業こふ生れど。多くて止むも才情
けまべ。板ふ鴨とる大倉山とどうにうり猶ぶくふ出
恥ぶ。ぶきぶ。ぶくぶ熟きあ河のけるや先。我くひのぎゆるぎ
百冊。古き頭向の思さぶ。ぶくむ人あくば。
志のぶめくもつ。多くけとやいくむ我を
いくくどとふ。

諫鼓堂尾佐丸述